

セ試「英語」出題には、 “優しさ”と“公正さ”が必要！ 問題構成の固定化は、受験生への配慮か？

旺文社 教育情報センター 18年7月

新課程入試初年度の18年センター試験「英語」には、懸案であったリスニングテストが導入され、音声テストも備えた英語力の判定試験に生まれ変わった。リスニングテストの実施で、筆記試験への影響が懸念されていたが、問題構成はこれまでと同様であった。

センター試験「英語」の問題構成はこれまで固定されてきたが、旧課程時における元・作題委員の述懐の中に、その源になる考え方や作題の基本方針がみられ、興味深い。

<英語の共通試験>

まず、高等学校の英語を対象とした、これまでの全国的な共通試験について振り返ってみよう。これまで、①能研テスト、②共通1次試験、③センター試験の3つがあり、それぞれ実施規模や受験対象者は異なるが、各時代の要請、目的に応じて実施されてきた。

● 能研テスト

「能力開発研究所テスト」(能研テスト)は、中教審答申「大学教育の改善について」(昭和38<1963>年)に基づき、学習到達度と進学適性について客観的検査方法を調査研究することなどを目的に、昭和38年～昭和43(1968)年まで実施された。能研テストには、学力テスト(国語、社会、数学、理科、外国語の5教科17科目)、進学適性能力テスト、職業適応能力テストがあった。の学力テストは、大学入学者選抜試験ではなく、到達度や習熟度など、平素の学習状況の測定を主眼においていた。

英語は、2・3年生が対象。出題形式や出題内容などは年度によって変動することはなかった。形式はマークシート方式で、リスニングテストが導入されていた。

能研テストの形式は、リスニングテストを除き、共通1次試験へ引き継がれた。

● 共通1次試験

昭和40(1965)年代は、受験生数の急増、合格率の低下、難問・奇問の入試問題など、受験環境の厳しさが社会問題化していた。こうした中、国立大の間で学力試験を第1次試験(客観式)と第2次試験(論述式)とに分け、これらを組み合わせる選抜方法が提唱された。

そこで、高等学校での学習成果を総合的に判定できるよう5教科7科目(社会、理科各2科目)の客観的な“統一テスト”構想が生まれた。これが「共通第1次学力試験」(共通1次試験)へとつながり、昭和54(1979)年1月、第1回共通1次試験が公立大も参加する形で実施された。

英語は試験時間100分、200点満点であるが、問題構成はあまり安定していなかった。問題数と解答項目数をみると、大問数は10問～7問、解答項目数も当初の83問から年度を追って次第に減り、昭和59(1984)年には57問までに減って、その後、再び増えた。読解問

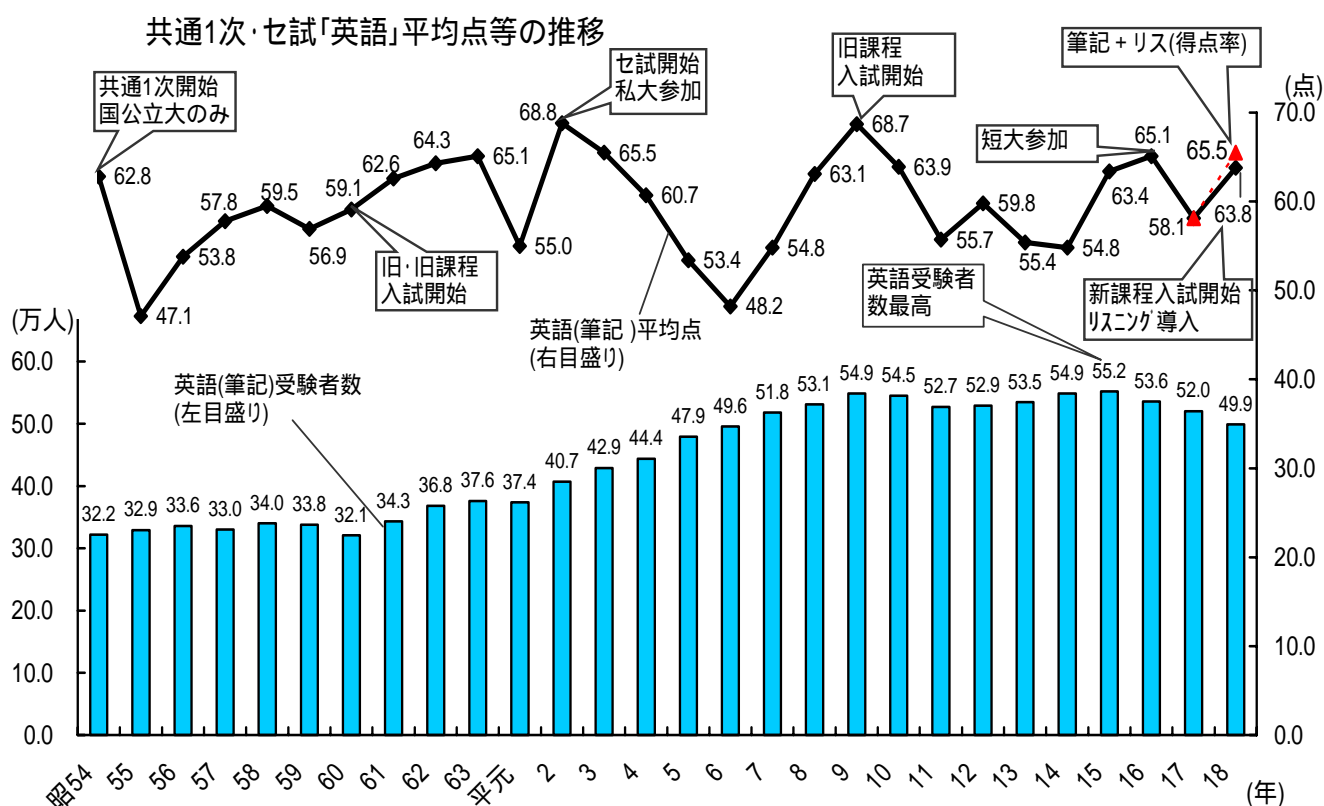
題の分量も安定していなかった。問題形式については特に分量の点で多くの課題が寄せられ、その結果、固定された問題構成にはならなかったようだ。

● センター試験

共通1次試験は難問・奇問を排し、良質な出題の確保などの点で評価を得たが、受験が一律に5教科7科目(昭和62<1987>年~平成元<1989>年は5教科5科目が主流)課せられていたことなどから大学の“序列化”が顕在化し、これによる“輪切り”の進路指導が行われたこと、試験の利活用が国公立大のみに留まったことなどが問題視された。こうしたことから、共通1次試験は第11回の平成元年で幕を閉じ、平成2(1990)年からは「大学入試センター試験」(センター試験)に継承された。センター試験は、国公私立の全ての大学が利用することができ(16年からは短大も利用)、受験教科・科目も各大学の自由に任せるア・ラ・カルト方式にするなど、入試の多様化に寄与するものとなった。

英語の問題数は、“大問数6”で一貫している。また、解答項目数は年度による多少の変動もみられるが、初期の5年間(2年~6年)は56~59問、その後は50~52問(14年以降50問)と、安定している。問題構成でみる限り、共通1次時代の設問数や解答項目数の大きな変動に比べ対照的だ。

なお、平成6年を境に解答項目数が減少しているのは、この年、平均点が5割を割り込んでしまったこと(平均得点率48.2%)に対する対応策とみられる(下図参照)。



- 注1. 200点満点を100点満点に換算。18年は「筆記」の平均点(100点満点換算)と、その受験者数を表示。
 注2. 18年の「筆記+リスニング」は、得点率(65.5%)を破線で表示。

ところで、高等学校における基礎的な学習の達成の程度を判定する試験では、受験生に過度の不安や緊張を与えず、普段(日常学習)の英語力を十分に発揮できるようにすることが求められる。そのためには、問題形式をできるだけ固定化させたほうがよい。

こうした点も含め、旧課程時におけるセンター試験「英語」の元・作題委員が作題者側の立場から、センター試験「英語」(リスニングテストがまだ導入されていない、筆記試験のみの英語)について述懐している。以下に、その一部を紹介する。

<元・セ試「英語」作題委員の述懐>

◎ “優しい”良問をつくるのは、“易しくない”

大学入試問題には、どこか安らぎの要素がある方がよい。そのためには作題に用いる材料は、なるべく受験生の興味を引くものにしようとする。受験生の想像力がやせ細る問題よりも、若々しい創造力を刺激して、少しでも受験生の“私”的部分が活かされる問題を作成したい。“優しさ”の必要性を、何よりも力説したい。

また、高等学校の教育事情と、そこにおいて醸成される受験生の気風にも通じておかなければならない。そのこともまた、“優しさ”の根底なのである。このような配慮こそが、“公平さ”に通じていくことになる。

英語の出題に関しては、つねづね“公平さ”に留まらず、“優しく”もあるべきだと考えていた。センター試験の英語は受験者数 50 万人を超える基幹科目であるが、受験生が“私”のこのようなところを評価してほしいと願っているような、そんな部分に、こちらから積極的に加担しようと思った。

センター試験「英語」の出題内容は、「高等学校学習指導要領」に準拠し、聞く、話す、書く、の 3 技能に読解力を加え、すべてマークシートで解答させる苛酷なものであった。例えば、単語の綴りを英式にするか米式にするか、アクセントは英式と米式でどう異なるのか、などといった小さな疑問の解決にも恐るべき時間をかけた。何しろ、大型の辞書を 20 冊くらいヒックリ返すのだから、ほとんど肉体労働といえる。さらに、句読点一つ一つの置き場所が気にかかる。引用文の場合などは、神経が磨り減った。“優しい”良問を目指しても、こんなことで誤ると、世間様から、とかくの批判を受け、センター試験の権威が地に落ちる。

◎ “公平さ”の実現

“公平さ”を実現させるには、出題内容が受験者の日常意識から離れたところに深入りしないことが必要だ。このことは、日常的にもあまり見慣れない語・語句・文法について出題しないことを意味する。

言葉は生きているし、よい表現は繰り返し使われる。入試問題には、この事実が深々と影を落とす。「生きた英語」を、「良い表現」をと、受験界からいわれても、既出であったり、

陳腐になっていたりして、たちまちシュレッダー行きとなる。センター試験では、問題作成の過程の証拠は一切残さないのである。

高校側では、「難解な英文は出題されまい」「日常的な表現が重視されよう」「文構造(S・V・O・C・M)を意識して、実用的な表現を教えておこう」などの作戦を立て、生徒を指導しているのであろうから、それを裏切らない作題を行うことも“優しさ”と“公平さ”の実現となるのである。

◎ 作題のあらまし

センター試験の問題構成は、大問数が6だとして、その間に一貫性がないとダメだ。全体を6に分割するのは、英語問題作成作業の近來の伝統である。簡単に破るわけにはいかない。世のため、人のためとは、こういうことをいう。

具体的には、発音・語彙・文法・談話・表現・図表など、コミュニケーション重視の角度からの学力評価ができるように配慮するとともに、単に知識としての英語力にとどまらず、実的な運用力も測定できるようにした。出題全体は、大小とりまぜ約50問、200点満点である。

各部分の問題作成の基本的な方針の概略は、次のようになる。領域的には、6つ程度に分かれ、実施年において相当程度固定されている。

➤ 問題作成の基本方針

【領域1】アクセントやストレスの発音については、マークシート方式によって評価を行うには、おのずから限界があることを見極めつつも、運用力向上の基礎としての重要性に鑑み、この種の問題を欠かすわけにはいかない。したがって、作題方式は、センター試験実施の年を追うごとに工夫が加えられている。何よりも、生きた英語使用の場面の設定を重視した形態が採用される。

【領域2】語彙・語法・文法については、日常的な英語運用において頻度が高いと思われる事項が優先的に選択される。また、文レベルに留まらず、談話レベルの学力の測定が重視される。語彙については、各社の英語テキストを精査し、高校生にとって標準性の強いものを選択するように配慮するが、時には、それから外れても、前後の文脈を考慮すれば語義を推測しうる単語を加えるようにした。

【領域3】表現力については、文レベルと文章構成上の力をみようとすものにまたがる。これもマークシート方式の強い制約を受けるから、出題技術としては、やや流動的にならざるを得ない。題材の選定に当たっては、高校生の関心のありかに留意しつつ、できる限り多岐にわたるよう努めるとともに、特殊な予備知識を要する題材を排除するような細心の注意を払った。

【領域4】図表・グラフ問題を加えることが試みられている。言語以外のメディアを交えて、英語を理解する力があるかどうかをみようとした。英語の運用力の一環として、さま

ざまな資料から推論する能力を評価したいからである。

【領域5】オーラル・コミュニケーション重視を打ち出した学習指導要領に順応する問題を作成するには、リスニングテストによるのが最良だと思うが、その導入が見送られている現時点(注:旧課程時)においては、長文の対話文にヴィジュアルな要素を加えて作題される。

【領域6】読解力を見極める問題としては、長文の物語風のものが採用される。一定の時間内に、文章の要点をどの程度まで把握する力があるかをみようとすることである。内容的には、特殊な事前知識を必要としないものに題材が絞られる。この6番目の領域が“公正さ”の維持に一番重要なところである。

以上の方針に依拠した上で、日常の学習の成果が十分に評価できるよう留意した。語彙は多く見積もっても、2,500語レベルに留めた。

平均正答率60%の実現に当たっては、重箱の隅をつつくような、または、曖昧な表現は、徹底的に避けることが必要だった。とはいえ、50ほどの設問のすべてについて正答率60%を見込むというのではない。小問ごとに、かなりの難易をつけ、メリハリを保つことも怠らなかった。

◎ 受験生への激励

まず、問題の形になれることだ。5年分の過去問題を解いていけば、出題者が何を求めているか、その傾向がわかるようになる。出題量が多いから、一つの問題ばかりを気にしていたら命取りだ。そのためにも、問題に慣れておくこと。時間をかけて作っているから、センター試験は変化球を投げてくる。シンカーにチェンジ・アップが加わる。公式、構文の丸暗記ばかりでは、万全ということにはならない。

内容的には高校2年生までの問題なのだから、学校の授業をきっちり受けておくのが一番の対策である。進度が遅れている生徒は、中学の英語の教科書3年分を徹底的に繰り返して、成果を出すことに努めてほしい。

オーラル・コミュニケーションの重視は、正論だ。だから、聞き取り試験(リスニング・コンプリヘンション)の導入は望ましいものである。しかし、今のところは、ハード面その他の難点があって、ペーパー・テストで対応しなければならない。日本人に今後期待される国際人としての資格は、英語をペラペラしゃべるに留まらず、日本文化への積極的な踏み込みと外国文化の積極的な取り入れを可能にするものでありたい、というような遁辞もまじえながら、センター試験の不足分は、大学ごとの個別試験で補ってほしいと思う。あと数年もすれば、センター試験にもリスニング・コンプリヘンションが導入されて、いよいよ充実してくることになるろう。

センター試験の成績と2次試験とは、見事なほどリンクしているかのように見える。2次試験での逆転はあまり考えられない。センター試験で好結果を出すことが何よりも重要と思われるのである。

(平成14年11月)